
❖ セ ミ ナ ー ❖

研究セミナー

ビルマと日本の仏教交流

2018 年 11 月 16 日（金）15：00～18：00

龍谷大学大宮学舎 西翼 2 階大会議室



伊東利勝氏
(愛知大学教授)

❖ 研 究 セ ミ ナ ー の 概 要 ❖

伊東利勝氏は、第一次、二次世界大戦中および戦後期において、日本とビルマの間で活動していた 3 人の出家者——①1907 年から 1929 年にかけて日本を数回訪ねたビルマ僧オウタマ、②1930 年代ビルマを含む東南アジアに布教に行った永井行慈、③1950 年代にビルマを訪問した藤吉慈海——の経歴と著作を通して、それぞれの国家・仏教観を紹介し、国家と宗教のあり方について考えを述べた。

I ナショナリズムと宗教

まず、ビルマ僧オウタマの東アジア遊歴と著書『日本国伝記』(1914)、『中国と日本』(1938)の出版を紹介した。特に、『日本国伝記』(1914)では、オウタマは日露戦争の結果に驚かされ、日本が近代化によって強国になったことに強く感銘を受け、日本に学ぶべきだと主張している。また、『中国と日本』(1938)は、当時の日本側の宣伝をそのまま受け入れ、「日本の中国侵略を正当化する」著書であった。オウタマは「国家や民族の独立と繁栄、つまりは西洋並みの近代化があつてこそその仏教の興隆」を目指し、イギリス占領下のビルマの独立に奔走した。彼は、最初は仏教の勉強のために来日していたが、「日本の仏教には関心なし」であった。

II 侵略（帝国主義）と布教

1930年代に、ビルマを含む東南アジアに布教に行った日本の日蓮僧永井行慈は、ビルマにおいて一度投獄されたことがあり、その時に『ビルマ獄中記』を著した。永井は、「小乗戒は個人を生きることであり、大乘戒は国家を生かすことである。それ故にビルマの仏教は個人主義には生きたが、あべこべに国家を滅ぼしてしまった」と考え、日本軍の東アジア・東南アジア進出は解放のための「菩薩行」とであると主張した。永井の場合、「国家あつての仏教という考え方ではオウタマと同じ」である一方、「ビルマの仏教は完全に否定、ここがオウタマと異なる」のである。

III 文明・文化と宗教

1950年代に、仏教交流の目的でビルマを訪れた日本の浄土宗僧藤吉慈海は『ビルマ游記』を著し、ビルマの「粗野」「野蛮」だった諸民族は、仏教の恵みによって、文明に接し、精神や文化などの様々な面において進化できたとし、「苦からの解放や仏教の発展は、国家主導により、民族の文明化によってはたされる」と主張した。

IV 国家と宗教

伊東氏は、上記三者について、「三者とも仏教の繁栄や実践を、国家や民族の枠内で考えている」という共通性と、「オウタマは国家・民俗が栄えて、御仏の教えも輝くとする」「永井も、個人より、まずは国家が大事であるという」「藤吉の場合、民族や国民の形成に不可欠な文化、文明をもたらした仏教」という各々の傾向性をまとめたほか、「ただ、根本的には同じ仏の教えを共有するもの同士、という感覚は少ない」「そして、ややもすれば相手の仏教を批判し、これを変えようとする」などの問題点を指摘した。

最後に、伊東氏は、我々は「心の平安を追求できる社会とは、どのようなものか」を考えるべきであり、また、「その前に、仏教の実践や交流は、国家や民族意識の制約を受けていることを自覚すべき」と、国家と宗教のあり方に対する反省を喚起した。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター リサーチ・アシスタント 李曼寧